

# 第一回自己PRコンテスト報告（日本語表現法）

高木香与呼・大竹聖基

## 1. はじめに

今年度で開設7年目を迎える一般教養科目「日本語表現法」（以下“表現法”とする）で、第一回自己PRコンテストを8月1日に一年生1，2，3，4組と，MS（モータースポーツエンジニアリング学科）組の5クラス合同で開催した。表現法では，初年時より二年間スピーチコンテストを実施していたが，様々な事情により実施が困難になり一時中断したため，今年度，新たに「自己PRコンテスト」として復活させた。表現法では，話す日本語に特に焦点を当てて教えてきた。身近なパブリックスピーキングの要素があることと，就職活動に必須と考えられることから，昨年度より新たに自己PRの作成と実践を導入した。それを受けて，今春学期期末にコンテストを開催することにしたものである。本稿では，第一回の自己PRコンテストの報告と，今後の課題について考察したい。

## 2. 実施の目的

本学の表現法では，読む・書く・聞く・話すの4項目を総合的に習得することを目的としている。2008年より開設されており，おもに社会での日本語の実用的な運用を目的としている。これまでの国語教育の成果で，読む・書くについては相当の習熟度があるものの，聞く・話すに関しては，個々に体験させることには，時間的な問題があったからか，一般的に能力の低い学生が多い。聞き方や話し方においては，経験値が重要という側面もあるのかもしれない。

そこで，聞く・話すについて，理論を理解したのち，その効果を実感するために，クラス内発表のみでなく，より多くの機会を作るとするのが主たる目的である。

この能力の涵養には，ただ聞いていたり，ただ話していたりのみでは，回数を重ねてもほとんど効果は期待できない。これに対して，あらかじめ聞く・話す能力のポイントを理解したうえで，分析しながら聞くのは，大変効果があることが分かっている。また，話すことも同様で，ただ話していてもポイントが理解されていなければ，多くの時間を実践に費やしても能力の向上は望めない。さらに，話すことにおいては，特に大勢の前で発表するという非日常の中での実践体験は，一度で多くのことが学習できる。

また，スピーチコンテストではなく，自己PRコンテストにしたのは，話す側も聞く側も興味

や関心の持てるものであれば、双方がより真剣に取り組めるだろうと考え、自己PRを選択した。自己PRの文章は、表現法授業の中で春学期に履修者全員が、すでに作成済みでもある。

発表者が、時間的な問題から15名と少ないため、自身の話す能力について自覚できる人数は少ないが、聞いて学ぶことについては、項目別に審査しながら聴くことで、パブリックスピーキングに必要なポイントの理解と必要性の実感を、ほとんどの学生が確認できる機会となると考える。

他方、本学は短期大学であるため、早ければ一年時の秋から就職活動が始まる。就職活動において自己PRは必須であるにもかかわらず、自分以外の人のそれを見る機会は大変すくない。この機会にできるだけたくさんの人の自己PRを聞くことは、学生自身の就職活動の一助とすることができるだろうと考えた。

なお、話す側、聞く側がともに真剣に取り組む動機づけのために、定期試験という位置づけで行うこととした。

### 3. 実施の概要と結果

#### 3.1 実施の概要

実施日：8月1日金曜日（本学試験期間中）1時間目

1, 2, 3, 4, MS組の5クラス合同（計約180名）

場所：223教室

当日のスケジュール：（表1参照）

表1 当日のスケジュール

時間	
0～5	審査用紙・出席確認票兼投票用紙配布
5～10	司会者 式次第及び審査用紙取り扱い説明、注意事項
10～30	発表と審査 1人1.5分×15名
30～50	投票⇒集計⇒審査 *学生出席確認票・記入
50～55	結果発表
55～60	審査委員長より総評

発表者：各組3名 合計15名（内留学生 5人）

自発性を重要視し、希望者を募った。得点が功を奏したのか、15名全員希望者がそろった。また、発表者には事前に発表用自己PRを提出させ最低一回の教員の事前チェックを義務付けた。発表者には自動的に20点を与えた。

教員分担：（1）審査委員長 長谷川学生部長

（2）審査教員 高木 大竹 高瀬教授 鈴木教授

（3）司会 高木

審査方法及び集計方法：

最初に、審査用紙（学生・教員共通 表2参照）と投票用紙兼出席確認票を配布。

審査用紙の5項目（1 全体のインパクト（印象）について 2 内容について 3 発声、発音について 4 表現力、態度について 5 説得力について）をそれぞれ審査しながら発表を聞く。

そののち、学生一人につき持ち点を1点として、最良と思った発表者一人に投票する。審査教員は一人につき持ち点が20点（分散して複数投票可）

番号を書いた投票箱を発表人数分教室の前方に置く。

学生は、全員発表終了後、自身の審査で一番の学生の番号を投票用紙に記入し、投票箱（自分の書いた番号の箱）に入れる。

全員投票終了後、教員と補佐の学生で投票箱の中の投票用紙を集計する。その後、教員分を加算し計算する。

得点数の多い順により1位から4位の順位確定。その後、集計結果を踏まえ、審査教員が審査員特別賞とユニーク賞を相談し決める。（今回ユニーク賞に該当者はなかった）

賞典：（各1人）

- ①最優秀賞（1位）
- ②, ③優秀賞（2位 3位）
- ④努力賞（4位）
- ⑤審査員特別賞（5位）

出席確認方法：

集計中に、各自で出席表に感想とともに記入して、クラスごとに集める。

※使用資料 自己PRコンテスト審査用紙（表2 学生・教員共通）、投票用紙兼出席確認票

表2 審査用紙

〈日本語表現法I自己PRコンテスト審査用紙〉

発表番号 （氏名）	1	2	3	4	5	6	7	8
評価項目	評価 ○, ×を 記入							
1 全体のインパクト（印象）について 好感が持てたか								
2 内容について 具体的か（わかりやすかったか）								
3 発声、発音について 聞き取りやすいか。 大きさ、強弱、緩急に工夫があるか。								
4 表現力、態度について 姿勢、身振り、表情、視線 に工夫があるか。								

5 説得力について 説得力があるか(納得できたか)								
点数 5点満点								

### 3.2 実施の結果

中国人留学生 5人を含む、全15名の審査結果は、下記の表3のとおりである。全体の3分の1にも及ぶ留学生が立候補してくれた。本学留学生の学習意欲の高さを物語っている。

1位の学生も留学生であった。2位の学生に大差をつけての最優秀賞だった。また、5位以内に3人の留学生が入っている。母国語ではないというハンデがあっても、海外からの留学生のほうが、パブリックスピーキングスキルが高いということだろうか。

投票数の下位の学生は、概して声が小さく聴衆に届いていなかったり、暗記していなかったり、安全のためのメモから目が離せなかった学生が多かった。また、一位と二位はスーツ着用の学生だった。

表3 自己PRコンテスト審査集計表

クラス	発表番号	講演者	点数1 学生点	点数2 教員点	合計	順位(賞)
1	1	A(※)	7	0	7	⑨
1	2	B	27	10	37	②優秀賞
1	3	C	9	0	9	⑧
2	4	D	2	0	2	⑬
2	5	E	0	0	0	⑮
2	6	F(留・中国)	11	5	16	⑤審査員特別賞
3	7	G	1	10	11	⑦
3	8	H	1	3	4	⑪
3	9	I(留・中国)	8	5	23	④努力賞
4	10	J(留・中国)	53	43	96	①最優秀賞
4	11	K(留・中国)	1	0	1	⑭
4	12	L(留・中国)	1	5	6	⑩
mse	13	M	2	2	4	⑫
mse	14	N	10	4	14	⑥
mse	15	O	12	13	25	③優秀賞

発表内容においては、それぞれの学生が自分の特色を具体的にまとめており、あまり差はないものであった。ただ、文章が長すぎたり、PRポイントが絞り切れなかったものもあり、やはり投票ポイントは取れなかった。

### 4. 学生の感想

まず、発表会後の感想の内容を、何について書いているかを表4に集計した。

80%近くの学生が何らかの良い刺激を受けたことが分かる。

そして、日ごろあまり意識していないノンバーバル部分と、言葉の内容を除いたバーバル部分

の重要性を強く意識したことが分かる。詳しくは、学生感想の抜粋に転載した。

また、各クラスに若干名しかいない留学生に関する記述のパーセンテージも多かった。そして、そのほとんどは批難ではなく、おどろきや称賛であった。

表4 参加者の感想の集計

内容別パーセンテージ（複数回答あり）		
内容		%
よかった（刺激になった、勉強になった）		77.5
バーバル	音	38.4
	内容	29.0
ノンバーバル	態度、見た目	23.2
留学生		22.5

### 学生感想の抜粋

学生全員の感想の全部を紹介することはできないが、以下に一部を転載する。

あくまで感想であるため、内容に関しては問わないが、試験として文章力は評価する対象であることを伝えて書かせた。そのため何らかの感じた事を書いていると思われる。

また、できるだけ原文を生かした。

「このような形式のテストというのは、今までにない新鮮さがあって面白いと思った。また、人の話を評価しながら聴くのは考えていた以上に頭を使うし、集中力が必要だと改めて実感した。」

「日本人より中国の方たちのスピーチのほうがうまいように聞こえた。⑩番のスピーチは、面白いエピソードも交え、最後まで熱い想いが伝わってきた。スーツで発表していた人は、容姿から入ったところは気合が入っていてよいと思いました。採点方法の改善を望みたい（25点満点）。聴衆がうるさくて聞こえない。」

「今日はたまたま早くこの会場に来て、先生方が準備をされていて、かなり本格的だと思いました。そして、この中で発表する人はとても緊張すると思いました。発表者はみんな頑張っていて、良い発表だと思いました。この発表会を聞いて、自分は面接の自己PRに役立つので、しっかり聞いて自分のものにしたいです。少し自分も発表したくなりました。」

「今回のスピーチはクラス内でやった時よりも日本語表現を勉強しているのですごくよかった。クラス内でスピーチしただけでもすごく難しくて恥ずかしかったので、この大きいところで、大きい声や、わかりやすく具体的に説明できるなんてすばらしいと思った。中には外国人の方など、まだ日本語に慣れていないと思うのでますますすごいと思った」

「今日はスピーチを聞いた。前に出てスピーチすることはすごく大変なことだと思うけど、みんな堂々と話しているのはすごいことだと思う。このすごいことをやっているのだから、自分も審査はしっかりやらなきゃいけないと思った。みんなしっかり自分の夢などを持っていて、しか

も、それをちゃんと言葉にして伝えられることはすごいことだと思った。緊張しているのが分かる人も何人かいたけど、その緊張しながらも話せる人はほんとにすごいなと思った。」

「難しいですね。今度私もやりたいです。みんなの姿を見ることができます。みんなよく頑張りました。ありがとうございます。」(ベトナム人留学生)

「いろいろな人がスピーチをしているのを聞いて、どのようにスピーチすれば聞き手に伝わりやすく、説得力が増すのか少しわかった気がしました。これからの人生で役立てたいです。」

「今回のコンテストを終えて感じるのが3個ほどありました。一つ目は、姿勢・身振りがとても重要だということです。こうやって聴く側に回ると、とてもよくわかりました。二つ目は、声の出しかたや強弱のつけかた、区切りかたの重要性です。少し工夫するだけで話の内容がすらすらと頭の中に入ってくるし、内容を本当に理解しやすかったです。三つ目は視線です。見ていると目があったりして、聞き手にしっかりと自分のスピーチを伝えたいという気持ちがしっかりと伝わってきました。就職ではとても重要なことなので、とてもいいと思いました。以上が思ったことです。これから自分も就職活動が始まります。なので今回聞き手にまわって、いいところ、だめだったところなどを参考にして、就職で有利にしていきたいと思いました。」

「人の発表を聞くことができ、強弱のつけかたにより、聞き取りやすさが変わることを学ぶことが出来ました。強弱をつけることで、どこを強調したいのかが分かるからだと思います。声が小さいと、内容が聞き取りづらく、何をしゃべっているのかがわかりませんでした。自分をアピールする場面になったときは、今日学んだことを生かしたいと思います。」

「各自が緊張しながらも、各々がしっかりとスピーチできていてすごいと思いました。内容を自分が授業中に考えていたものよりも、具体的でわかりやすく素晴らしかった。授業の最初にやった自己紹介のやり方も、発表者全員が完璧でとても聞き取りやすかった。態度もイライラしていたりする人はいなくて、緊張している中落ち着いていてとてもよかった。今回のコンテストでは、自分は聞く側でしたが、将来就職をすれば、仮名多くの人の前で発表やスピーチをする場面はあると思います。今までの授業と今回のコンテストで見たことを学んだことを身に付けられるようにしたいと思いました。」

「いろいろのおもしろい内容で説明力強のスピーチしてくれました。特に留学生の皆さん、自分のは発表したいのことを上手に発表しました。私は中国人なのでどうしても中国人をひいき目に見てしまいますが、投票者はそいた国籍にかんきなく、平等に評価し拍手していたのがとても好感を持っていました。発表者全員よかったと思います。遅刻してしまたことが大変悔やまれる発表会だと思います。」(中国人留学生)

「いろいろな人がいますね。しかし、私が思うに声に元気がない人が多いね。あと、笑顔。やっぱね一笑顔大事ですね、聞く気になるね。」

「自分の中では留学生の印象が良かったです。日本語に慣れず、内容が伝わりづらい人もいましたが、人に伝えようとする努力がとても強く伝わりました。留学生は自動車と日本語に付いて

勉強しています。そして彼らは一生懸命勉強しています。そんな彼らを見ていると自分も負けてられないなと思いました。自己PRは就職に使います。今日の発表者の人たちのように自分もうまくPRできるようになりたいです。自分のためにもなる貴重な一日でした。」

「人のスピーチを聞いて、まず自分で自分のことがすごくわかっていてそれが一番すごいと思いました。そして一人一人話すことは必ず違って同じような生活をしている人はいないんだなと思いました。自分がスピーチしようと思ってもあんな風にできないし、評価はしたけれど自分よりはみんな上だと思っています。自分も発表者の人のようにコミュニケーション能力をつけたいです。」

「みんな緊張していたが、しっかりとスピーチできていてよかった。人それぞれのやってきたことくふう、努力してきたことをいろいろ聞けてすごくよかった。またこのようなコンテストがあったら参加したいと思う。」

「スピーチをする場合、聞き手が最も大切だと感じた。緊張していても一生懸命に発表している方に対し失礼にならない態度で臨まなければいけないと思う。聞き手が、話したり寝たりしていると、発表者の声が届かず、とてももったいない。自分がもし発表者だったらやる気にならないと思う。これからは、さらに発表者の気持ちになってスピーチを聞きたい。」

「ほとんどの人が紙を見ながら話していて、そのせいで声が小さくなり、声が聞こえない人が多くみられました。でも、人の前の出て、自分のことをアピールするということは、とてもいいことなので、発表者の人たちはとてもいい経験をしたと思いました。またこういう機会があれば僕もしたいなと思いました。僕ならもっとちゃんと発表できると思います」

スピーチコンテストを聞いて私は、やはり第一印象は大事だなと思いました。ふらふらと前へ出て、体をくねらせて立っていると、とてもやる気がなく見え印象が悪くなりました。たとえ話の内容が良くてもそれが邪魔をしてしまいました。そして、メーカー等の発表かいと比べて決定に違うと感じたのは、表現力の差でした。メーカーの社長や担当者は、感情をこめ、自社の製品がいかに優れているかを熱弁しています。身振りなどもなかったので残念でした。かかっているものが違うというのがありますが……。あと、前のほうがうるさかったです。」

「周りがざわざわとうるさく、しっかりとスピーチが聞き取ることができなかった。結果、評価をすることが難しく×を多くつけてしまった。もし自分がスピーチする側の立場だったら、緊張して声が出ず、『あいつ何言ってるの』状態になっていたと思います、スピーチを見て聞いて、声が大きかったり小さかったり、きよろきよろしていたり、じっとしていたり、様々な様子を見れて勉強になりました。」

「場としてはとても悪かったです。発表者が話しているにもかかわらず、話している人がいたり寝ている人もいました。自分の席は後ろから2番目の席だったので、とても聞き取りづらかったです。ですから、そういった人たちを、後ろにいかしてほしかったです。また、発表全体としては良かったです。うまい人と苦手そうな人との差はありましたが、姿勢や声を張ってくれたり、

文章を覚えていたり、例を挙げて具体的に話してくれていたのので、聞く側としてはとてもよかったです。さらに、発表を見ていて、良い印象のスピーチと悪いスピーチの違いを知ることができてよかったです。これを、自分の就職活動に活かします。」

「みなさん、堂々と落ちついて発表されていてすごいなあと思った。スーツ姿がさわやかで、好印象でした。素晴らしいと思いました。外国人の方も聴きやすい日本語で素晴らしいと思いました。とても有意義な時間だった。最後に、このようなコンテストはとても良い時間でした。又機会があれば参加したいです。」

「たとえどんなに良いことを言っている、相手に聞こえないことには意味がないものだと思いました。発言者本人や、近くの人が聞こえていても、後ろのほうになると聞こえないこともあるのだと今回改めて感じました。実際の面接の際にも、面接官の方とは距離があると思うので、明るくはっきりした声で伝わるように発声しないといけないと思いました。たとえ少しくらい内容が分かりにくくても、伝えたい内容が相手に伝われば、それでいいとも思いました。」

「今回のコンテストで思ったことは、人それぞれの味があるということが分かりました。声が大きかったり、表現力の違い、内容のおもしろさが挙げられます。やはり、留学生は全体的に表情や、声の出し方が素晴らしいと思いました。日本人は内容が分かりやすく、評価しやすかったです。私は、今日見てきた人たちの全てを超えられるとは思いません。ですが、これからでも十分スピーチの能力は上げられると思っています。」

「見ている人たちがうるさくてスピーチをしている人の声が聞こえづらかったです。頑張ってスピーチしている人がいるのに聞こうとしないザワついている人に少しイラつきました。その中でも一生懸命スピーチする人、特に日本語が苦手な留学生に惹かれました。後ろまで声が聞こえにくい人もいましたが、しっかり内容を考えて覚えてきている人もいて、すごいと思いました。でも、いまいち内容がはっきりしていない人もいたのが残念でした。私もスピーチをする機会があれば、みんなに聞き入ってもらえるような内容で発表できるようになりたいです。」

「発表者は全員スピーチに対するやる気があって、今日にむけて、内容を覚えてきたということが伝わってきた。しかし、周りが騒がしくて評価項目の2, 3, 5をしっかりと評価することができなかった。マイクを使っていた人や、周りが落ち着いているときに発表した人はみな、内容がしっかりと聞き取れて具体的なものも多かっただけに、聞こえなかった人のがしっかりと評価できなくて残念だった。」

「半分くらいの人が声が小さくてあまり聞き取れなかった。自分では、相手は聞こえると思っていて話していたと思ったけど相手に聞こえないと意味がないと思った。だから自分も話すとき、相手が聞き取りやすいようにしないといけないと思った。でも、内容自体はとてもいいと思った。スピーチは頭だけではできないから、相手にどれだけ伝わるかをしなければいけない。」

「外国人の発表は表現などは良いでしたが、まだ日本語が難しいのか、早口でカタコトなので内容を理解することができないことが多かったです。」

「発表者みんなが全員に伝わるように声を出しているように思えた。それでも体が動いている人や、声が聞こえなかったり、何が言いたいのかわからない人もいました。声を通る人ほど、聞こうという気にもなるし、内容も聞こえてくるので、教室全体にひびく声は必要だと思いました。」

「今回のコンテストで第一印象でほとんどが決まるということをあらためて実感しました。一番後ろの席で聞いていたのであまり声が聞こえず、ほとんどが第一印象で決めたといってもいいぐらいでした。声が小さいと内容もわからなければ説得力もないので、やはり声は大きく全体に聞こえるハキハキとした声で発表やスピーチをすればいいことが分かりました。審査員として聞いて面接の時のやり方を考えようと思いました。」

## 5. 考 察

感想を、試験として評価される前提で書かせているということを差し引いても、感想を見る限りでは、見て学ぶ、して学ぶの両立が具体性をもって出来たことが分かる文面が多くみられる。

他方、日ごろの、友人や他クラスの同級生、そして、留学生への見方が変わるいいチャンスとなった。

実際に何人かの話を目の当たりにして、バーバルの音部分とヴィジュアルのもつ重要性の認識が、理論ではなく実感として理解できたことは大きな成果の一つである。

学生の感想にあるように、採点方法を5点満点ではなく、5項目×5点の25点満点にしたほうが、集計時一番の学生を選びやすいこともわかった。筆者も当日審査中、○と×だけでは足りなくなり、◎や△などを併用していた。記号より学生の提案方法のほうが、各項目が5点のほうが審査も集計もしやすくなると推察できる。

筆者の想定外であったことは、発表している同年代の同級生や留学生の、日ごろ見ることのできないまじめに取り組む態度についての、学生らの驚きである。身近に感じていたり反対に身近には感じていなかった友人への、関心や認知、そして尊敬の念さえ生まれたことは、今後の学生生活での交流に、よい変化をもたらしてくれると期待できるのではないだろうか。

真剣に聞いていたが聞こえなくて残念という声がとても多かった。これは、周りや前方の学生が騒がしいという状況もあるが、本人の声が小さくて聞こえない人もおり、あらためて声が届くことの重要性を実感できた学生が多かった。発表を聞かないで騒がしいことは、もちろん問題だが、聞きたいときに周りが騒がしいことがどんなに迷惑なのかという体験は、自分勝手な行動がいかに迷惑な行為なのかを知るいい機会にもなった。

また、けがの巧妙で、会場の一部がざわついていたために、かえってノンバーバルの重要性を実感したところもあるのは否めない。

今回の経験を生かし、それぞれの学生が、自己の後悔が残らない就職活動を送り、希望する就職をはたせることを望んでやまない。また、図らずも、届かない声がいかに何も伝えないうかを痛感してもらう機会にもなった。様々な要因があるのだが、しっかり聞こうとしている学生が聞く

ことができなかったという事実だけは大変残念である。

しかし、多くの学生にとって決して無駄ではない経験であることも、感想から読み取れる。状況が許すのであれば、今後もぜひ継続したい。

## 6. 今後の課題

試験という位置づけで、しかも1年全員で行うことは再考の必要がある。しかし、履修者全員参加であることは、いつものクラスメートだけのなれあいを防ぐ意味と、大勢の前で緊張することを体験するという意味がある。履修者全員参加で、なおかつ学生が真剣な態度で参加できるものを、試験以外の方法の模索が必要である。

また、試験時間は一教科60分のため、一時間以内に収めたが、一時間では審査時間と集計時間が足りず全体的にあわただしさが漂った。そして、たくさんの事例を聞くということでは、もう少し時間が取れば、発表者を増やすことも可能である。

投票箱が小さく、投票・集計ともに時間のロスがあった。投票、集計方法も再考の必要性を感じた。

感想に関して自由記述式のみであったが、項目別やY/N式のアンケート形式のものがあつたほうが、実態がより詳細に把握できるのではないか。次回開催時には、感想とアンケートを組み合わせたい。

謝辞；末筆ながら、今回の大会開催にあたり、快く審査委員長を引き受けてくださった長谷川審査委員長、そして、審査はもとより、企画・実施にあたりいろいろとご指導とご協力をいただいた、高瀬利恵子先生 鈴木敦巳先生、教務課の皆様、誠にありがとうございます。